

1 通の エアメールから ～私が研究者としてスタートした日

「何となく」の学生時代

同志社大学経済学部に着任して早いもので13年になりました。自身の研究者としてのスタートを紹介することで、初心を思い返し、気持ちを新たにする機会にしたいと思います。

1991年に東京大学の文科Ⅱ類（経済学部）に入学しましたが、経済を専攻した理由は消極的なもので、将来就職するのに一番いいかな、ぐらいのことでした。勉強などする気もなく、講義は初めの2回ほど出席し、試験前に適当にごまかすというような状況でした。

大学院を受験したのも、高尚な意識があったわけではありません。大学3年生も終わりに近づくと一応進路

茂見 岳志

Takeshi Momi

【研究テーマ】

不完備市場モデルの
一般均衡分析



のことを考え、公務員になろうと思ひまして勉強を始めました。勉強といっても公務員試験用の問題集を解くというようなことでしたが、それでも勉強して問題が解ければ面白いわけで、初めて経済学も面白いなと思ひました。そんなこんなでもう少し勉強してみようという気になって、大学院受験を決めたのですが、振り返ってみると、よくあんな状態で臆面もなく大学院を志望したと思ひます。

幸運なことに大学院に合格しまして、そこから研究の日々が始まります。なぜ今の研究分野に至ったかについては以前に書く機会をいただきましたので省略し、大学院一般について紹介します。

論文が認められてこそその世界

当たり前ですが、大学院では研究が行われています。研究といっても経済学では大掛かりな実験設備があるわけでもなく、特に私の分野では紙と鉛筆で机に向かうだけです。机に向かって何をするのかといえば、これまた天下国家のことを考えるのでもなく、先人の論文を勉強して、そこから、ささやかながら自分の発見を見つけようとするわけです。偉大な研究者は強い使命感に導かれて研究するものかもしれませんが、私のようなもの、なおさら大学院生の私にとってはいかに業績を出すかということが死活問題でした。何が業績かといいますと、経済学の雑誌がピンからキリまで多数ありまして、論文を書いてそこに送ると、内容が良ければ掲載してくれます。



そのような論文の積み重ねが経済学を形成しているのであって、論文が出るということは、大げさにいえば経済学の流れの中に足跡を残すということです。もっとも、優れた論文は、多くの人がそれを読み共鳴するからこそ優れているのであって、私の論文はめったに読まれないのですが…。とにかく大学院生の私にとっては、自分の論文が雑誌に掲載されるということが目標ではありましたが、いかんせん知らぬことですから、どういう過程を経るものなのか、具体的なことは何もわかりませんでした。

小さな一歩が大きなスタート

修士論文で取り組んだテーマの結果を得て、論文を書き、初めて送った雑誌が *Journal of Economic Theory* という雑誌でしたが、あえなく却下。現在では論文の投稿や返信もインターネットでやり取りされますが、当時は実際の郵便でのやり取りでした。投稿から半年ぐらい経ってやってきた返信を開けると「駄目です」という手紙と、なぜ駄目かが書かれたレポートが入っていました。残念な結果ではありましたが、ともかくも自分が投稿した論文を誰かが読んでくれて、返事がもらえるということがわかってうれしかったです。そのレポートにもう少し専門性の高い雑誌に送ったらどうかと書いてありましたので、要するにこの雑誌のレベルではないと言っているわけですが、次は *Journal of Mathematical Economics* という雑誌に送りました。今度は「もっと

わかりやすく書け」などやり取りがありまして、いい感じだと思っていると、ある日ポストを開けると Air Mail が。おそるおそる開けると、OK のようであるが、英語なので一回読んだだけではわかったようなわからないような。もう一回読んで、掲載決定。再度、間違いないことを確認して、小さくガッツポーズ。私が研究者として生きていくことが許された、スタートした瞬間でした。もちろんその後も、論文を書いたら投稿しているのですが、この時の喜びを超えることはありません。却下され続けているということではありませんよ。念のため。

当時を振り返りますと、やみくもではありましたが純粋に研究に取り組んでいたことが微笑ましく思い返されます。やみくもはともかくとして、純粋な気持ちを忘れず、研究・教育に取り組んでいきたいと思います。

